

誰もが出来ることだが、
誰もが出来ることでない
その1

日曜日の朝のことだった。

その光景に接して、とても嬉しい気持ちになった。

いつものように起き抜けにベランダで軽い体操をしていると、下の道路の方から呼び掛けるような声がする。

覗き込むと、車道の端を歩きながら、こちら側に平行する歩道に向かって、四十代ほどの男性が何か指示を出している。

呼応するように、小学生とおぼしき子供と母親なのか、うなぎながら歩道のごみを拾ってビニール袋に取り込んでいて、袋には既に大分ごみが溜まって膨らんでいる。

男性は車道のごみ、子供と母親は歩道のごみ、というように役割分担をしているようだ。

腕章がないところを見ると、家族でボランティア活動しているに違いない。

「有難うございます！」

思わず、僕はそのご家族一行に、大きな声で御礼を伝えていた。

（彼らはこちらを見上げて軽く会釈し、そのまま同じ動作を続けながら坂道を下って行った）



誰もが出来ることだが、
誰もが出来ることでない
その2

(中国新聞デジタルより引用、編集)

広島市に住むある中学生の手元に「15」の数字が入った野球のサインボールが届いた。贈り主は元広島東洋カープ投手・黒田博樹さん。

9月のある朝だった。

その中学生がいつものように道端のごみを拾っていると、サインボールにマスク姿の男性が近づいて来た。背が高く、がっちりとした体格。「拾います」と男性は言い、一緒にごみを集めてくれた。

別れ際、中学生はのけぞった。元カープの黒田さんであったのだ。

カープファンの中学生は、慌ててカバンから使いかけのノートを取り出し、サインをお願いした。「失礼かも」と思ったが、黒田さんは快諾し、ボールペンでサインして立ち去った。夢のような朝の5分間の出来事だった。

後日、黒田さんのサインボールがサイン色紙とともに学校を通じて届いた。

中学生が清掃を始めたのは半年前。川や海に流れたごみを魚などが飲み込んで死んでしまうということを知って、心を痛めた。

「自分に出来ることもある」と、連日タバコの吸い殻やレジ袋、ペットボトルなどを拾い、学校や自宅で捨てているという。